

ヒッタイト語とフルリ語の前接的接続詞 -ma¹⁾

大 城 光 正

1. はじめに

古代オリエントでは、シュメール楔形文字を源来とするアッカド文字（バビロニア文字、アッシリア文字）、ヒッタイト文字、フルリ文字、ウラルトゥ文字、ペルシア文字等の楔形派生文字が出現した。このような文字の伝播は書字法のみならず、同文字体系を有した民族の言語にも大きな影響を及ぼしたことが推察される。ヒッタイト楔形文字はバビロニア系楔形文字を基にして改作された文字体系であるが、同文字の成立にはハットゥシリ1世のシリア遠征を契機にして当地に定住していたフルリ人を介してヒッタイトの都のハットゥサに移入されたという説が有力である。ヒッタイト語が印欧語として解説されて以後、同言語が古層の印欧語であるために印欧（アナトリア）比較言語学的な考察が展開されたのは当然のことであるが、ヒッタイトに大きな影響を及ぼした非印欧語系のフルリ語とヒッタイト語間の言語的接触に関する研究はまだ僅少といわざるを得ない²⁾。そこで本稿では、ヒッタイト語とフルリ語の両言語において存在する前接的等位接続詞 -ma の用法の類似性を指摘することによって、両言語間の言語的影響を推察してみたいと思う³⁾。

2. ヒッタイト語 -ma⁴⁾

ヒッタイト語の前接的等位接続詞 -ma は、前件を受けて後件の相反する事柄を結びつけるための接続的な用法（意味「しかし」）として主に認められている⁵⁾。

(1) san ispandi nakkit dahhun pedisi-ma ZA. AH. LI-an anienun (KUB III 2 Rs. 47-48)

「私は夜に (ispandi) 武力で (nakkit) それ (s(u)-an=ハットゥサ) を手に入れた (dahhun) が、しかし (-ma)、その地に (pedisi) 雑草を (ZA. AH. LI-an) 生やした (anienun)。」⁶⁾

(2) takku BĒL. ŠU teizzi sēr-wa-si sarnikmi nu sarnikzi takku mimmai-ma
nu IR-an-pat suizzi (KUB VI 3 IV 46-47)

「もし (takku) その主人が (BĒL. ŠU) 「私が彼のために (sēr-si) 償う (sarnikmi)」 と言え
ば (tezzi)、彼が償うべし (sarnikzi)。しかし (-ma)、もし (takku) 彼が拒否する (mimmai)
ならば、その奴隷を (IR-an) 失うべし (suizzi)。」

(3) ta apiya UD-at UL kuitki [iyazi] man lukkatta-ma tapa hassanzi ^{KUS}NĪG. BĀR-an
ussianzi (KBo XVII 74 I 30-32)

「その日は (apiya UD-at) もう何もしない (UL kuitki iyazi) が、しかし (-ma)、夜が明
けると (lukkatta) 幕を (NĪG. BĀR-an) 開き (hassanzi) 揚げる (ussianzi)。」

上記と同様の用例は多数認められ、反対・相反を示す等位接続詞 -ma として認知されて
きたが、この -ma の用法が大半の文例において適用されるものでもない。むしろ、前文に
引き続く後文の接続に関しては必ずしも反意的、相反的な意味の表出にとどまらず、話題
の変更、関心テーマの修正、前文を受ける形での後文の話題発展等のように、より広範な
談話的使用が推知される。特に古期ヒッタイト語文献に見られる -ma の用法は非常に断片
的で、むしろ同様の接続詞要素である -a/-ya の用法の中に順接的な用法と併置されて反
意・相反的な「しかし」の用法が見られることはすでに Otten (*StBoT* 8, pp. 89-92) や
Neu (*StBoT* 18, pp. 101-103) による先行研究で指摘されているとおりでである。

そこで、以下の用例のように、前件と後件を相反的に結びつける用例ではなく、前件と
後件を順接的に結びつける連繫的 (copulative) な接続用法も散見される。同用法は一般的
には接続小辞 -a/-ya で表出されるものであるので、同用法は -ma の用法の中でも無視でき
ない用法と看取される。

(4) nu NINDA-an ezzatani watar-ma ekuteni (KUB XIII 4 II 70)

「そして汝らはパンを (NINDA-an) 食べ (ezzatani)、そして (-ma)、水を (water) 飲む
(ekuteni)。」

この文脈はヒッタイト語の解読者フロズニーがヒッタイト語解読の手がかりとした用例
のひとつである。同箇所の前接接続詞 -ma は上述の相反的な意味の表出ではなく、明らか
に「汝らのパンを食べて、それから水を飲む」という一連の動作の連携的な一連の行為の
表出である。

(5) nu LÚ IL. KI teizzi ki ^{GIS}TUKUL-limet ki-ma sahhamit (KBo VI 3 II 37-38)

「受封者が (LÚ IL. KI) 言う (teizzi) 「これは私の TUKUL であり、そして (-ma)、
これは私の sahhan である」と。」

この文脈は受封者がもつ義務である TUKUL (土地関係) と sahhan の羅列である。

(6) GUD-usza AMAR-un UL kappuwaizzi UDU-us-ma-za SILA₄-an UL kappuwaizzi

(KUB XXXIII 37+39 IV 4-5)

「親牛は(GUD-usza)子牛を(AMAR-un)世話しない(UL kappuwaizzi)し、そして(-ma)、
親羊は(UDU-us)子羊を(SILA₄-an)世話しない。」

以上のように、前接的接続詞要素である-maは、従来、「しかし、しかしながら、～だが」等という訳で表出可能な反意・相反的な接続用法(用例(1)～(3))が認知されるのみならず、「そして、そこで、」等の一連の連繋的な接続を表出する順接的用法も(用例(4)～(6))認められる。

このような指摘考察から、前接的接続詞要素-maの機能は、英語訳では、“and, but, however”で訳出されるような文脈依存型の接続詞であると言わざるを得ない。

3. フルリ語-ma

フルリ語にも、ヒッタイト語と同様の前接的等位接続詞-maが存在する。本稿では同要素がヒッタイト語の-ma接続詞と同様の機能を有していることを、ヒッタイト語とフルリ語による併記文書の用例(Neu, *StBoT*32)を引用することで、明らかにしてみたいと思う⁷⁾。

(7) KUB XXXII 14:

(フ) Vs. I 13-15: häiten āse kibēillasus ashi-ma garenasus

「獣肉を(āse)猟師は(kibēillasus)取るべし(häiten)、そして(-ma)鳥皮を(ashi)
鳥猟師は(garenasus) [取るべし]。」

(ヒ) Vs. II 15-16: ^{UZU}ī ^{LÜ. MES}SA-A-I-DU-TIM dandu

KUŠ-ma ^{LÜ. MES}MUŠEN. DÛTM dandu

「獣肉を(^{UZU}ī)猟師は(^{LÜ. MES}SA-A-I-DU-TIM)取るべし(dandu)、そして(-ma)
鳥皮を(KUŠ)鳥猟師は(^{LÜ. MES}MUŠEN. DÛTM)取るべし(dandu)。」

フルリ語とヒッタイト語の目的語・主語の語順上的一致と、フルリ語の動詞の文頭位置(第二文では動詞häitenの省略)に対するヒッタイト語の動詞の末尾位置の相違を勘案しても、接続詞要素-maの文頭要素に接置して接続的な意味を表出する機能上の同定は明確である。

(8) KUB XXXII 14:

(フ) Vs. I 28-29: agāwe_e amūtum esabē-ma purutum

「こちら側の(agāwe_e) [牧場地]に彼は達しなかった(amūtum)し、また(-ma)

あちらの(esabē) [牧場地]にも達しなかった(purutum)。」

- (ヒ) Vs. II 29-30: nas-san tapusas úesiyas ārs UL ki-ma úemit UL
「他方の(tapusas)牧場地に(úesiyas)彼は(n(u)-as)達しなかった(ārs UL)し、
そして(-ma)こちらの(ki) [牧場地]にも達しなかった(úemit UL)。」

(9) KUB XXXII 13:

- (フ) Vs. I 21-22: tabsāhina sukmustab wa_antarininā-ma akib nehirna
「食事担当官吏が(tabsāhina)入ってきて(sukmustab)、そして(-ma)
料理人が(wa_antarininā)胸肉を(nehirna)運び入れた(akib)。」

- (ヒ) Vs. II 21-23: ^{L^U.MES}SAGI-ya anda arir
^{L^U.MES}MUHALDIM-ma-kán ^{UZU}GABA^{HI. A} sarā dāir
「食事担当官吏が(^{L^U.MES}SAGI-ya)入ってきて(anda arir)、そして(-ma)
料理人が(^{L^U.MES}MUHALDIM)胸肉を(^{UZU}GABA^{HI. A})持ち上げた(sarā dāir)。」

(10) KUB XXXII 13:

- (フ) Vs. I 25-29: amatena ēna ^DIM-wa_alla nahhusu wa_antin
^DAllāni-ma tātiyassi ^DIM-uppama tabsāha mēha
「古い神々を(amatena ēna)天候神の(^DIM-wa_alla)右側に(wa_antin)
置いた(nahhusu)が、しかし(-ma)アラーニ神は(^DAllāni)慈愛を示して
(tātiyassi)、天候神に対して(^DIM-uppam)食事官吏として(tabsāha)
振舞った(mēha)。」

- (ヒ) Vs. II 26-29: karulismaza DINGIR^{MES}-us ^DIM-as ZAG-az asasta
táknas-ma ^DUTU-us ^DIM-unni piran ^{L^U}SAGI-as iwar tiēt
「古い神々を(karulismaza DINGIR^{MES}-us)天候神の(^DIM-as)右側に(ZAG-az)
置いた(asasta)が、しかし(-ma)大地の太陽神は(táknas-ma ^DUTU-us)
天候神の前で(^DIM-unni piran)食事官吏のように(^{L^U}SAGI-as iwar)として
振舞った(tiēt)。」

(11) KUB XXXII 19:

- (フ) Vs. I 1-3: ^{URU}Ikinkalishenama nakki putkina keltai nakki-ma ^mPurran
「Ikinkalisの息子たちを(putkina)首尾よく(keltai)解放せ(nakki)、
そして(-ma)Purraも解放せ(nakki)。」

- (ヒ) Vs. II 1-2: DUMU^{MES} ^{URU}Ikinkal arha assuli tarna
arha-ma-an tarna ^mPurran-pat
「Ikinkal(is)の息子たちを(DUMU^{MES})首尾よく(assuli)解き放せ(arha tarna)、

そして(-ma)Purra も解き放せ(arha tarna)。」

以上のフルリ語とヒッタイト語の併記文書の用例のように、フルリ語の前接的接続詞要素-ma はヒッタイト語-ma と文脈上同様の機能を持つ要素と指定することができる。このような文接続における統語的な用例の類似は両言語間の言語接触が背景にあると暗示される。

4. 接続詞-a/-ya と接続詞-ma

ヒッタイト語の前接的等位接続詞には-ma 以外に、同様の機能を有する-a/-ya も存在する。本来この接続詞形は語と語を接続する機能が顕著であるが、節や文を連携的に接続する用例とともに、相反的に接続する用例も有していることが指摘されている。特に ten Cate (1973) の指摘のように、複数の平行文書における比較考察において、接続詞-a/-ya 形が-ma に交替している用例が確認されている⁸⁾。

(12) KUB XXVI 17 I 7-8:kuis arha tarnumas-a EREM^{MES}-az na-an ^DUTU^{SJ} arha tarnahi
「軍隊から(EREM-az) 放免されている(arha tarnnumas) 者(kuis)、その者(-an)を太陽神である(^DUTU)私が解放する(arha tarnahi)。」

上記例のヒッタイト語議定文書(KBo XXVI)は中期ヒッタイト語で記述された文書である。同文書の後期編纂の文書である KUB XIII(20 I 11)の照応箇所では、tarnumas-ma のように、接続詞-a から接続詞-ma に交替されている。

(13) KBo V 3+I 17-18:zig-a man ^mHuqnas ^DUTU^{SJ} zilatiya *INA* EGIR UD^M assuli *UL* pahhasti
「汝(zig)、フッカナが(Huqnas)我が太陽神を(^DUTU)将来(zilatiya)、後の日に(*INA* EGIR UD)親しく(assuli)守らない(*UL* pahhasti)時には(man)、～」

フッカナ(Huqqana)文書は後期文書の中では古期の言語的特徴が散見される特異な文書と思考されている⁹⁾。同文書と類似した内容を出している後期文書(KBo V 13 II 13-14 : man-ma) の同箇所では、接続詞-a から接続詞-ma への交替例が見られる¹⁰⁾。

(14) KBo V 4 II 43-44:nu man ^{L0}KÚR kuiski niniktari nas apedas *ANA* ZAG^{HI.A} GUL-wanzi
paizi zig-a istamasti
「或る(kuiski) 敵(KÚR)が移動して(niniktari)その(apedas)境界に(ZAG)戦うために(GUL-wanzi)移動してくる(paizi)と(man)、汝は(zig)[そのことを]耳にする(istamasti)。」

同文書と類似した内容を出しているウィルサ国アラクサンドゥ王との条約文書(KUB XIX 6 III 47 : zig-ma) では、接続詞-a から接続詞-ma への交替例がみられる¹¹⁾。

(15) KBo V 13 II 16-18: zig man memian piran para istamasti nu *AWATU* ^DUTU^{Sf} lē huskisi
「汝が(zig)その事を(memian)前もって(piran)耳にすれ(para istamasti)ば、
太陽神の(^DUTU)言葉を(*AWATU*)決して期待する(huskisi)な(lē)。」

上記文書の平行文書 KBo IV 3 (II 12) の zig-ma、さらに文書 KBo VI 41 (II 35) の zi-ga
(**zig-*a)のように、後期文書の接続詞使用における混同が示唆される。

以上のことから、ten Cate の指摘のように、古期文書における -a/-ya が中期、後期文書では -ma への交替傾向が存在し、後代における接続詞 -ma の拡大使用が推察される^{1 2)}。つまり、-ma 接続詞の使用の拡大傾向が、後代に増大傾向となったフルリの影響の時期と重なることを示唆するものであり、ヒッタイト語の -ma とフルリ語の -ma の機能上の類似のみならず、両語形の歴史的な背景を基にした相互影響の有力な在証としても考えられる^{1 3)}。

5. おわりに

以上の考察から、ヒッタイト語とフルリ語における前接的等位接続詞 -ma 「そして、しかし」は音形上の同一性のみならず、用法上も互いに類似した機能を有していることが明白となった。このことは両言語において -ma 接続詞の用法を独自に発達保持したものではなく、相互の言語的影響、接触の存在を推察させるものであろう。とはいえ、ヒッタイト語の -ma もフルリ語の -ma もその正確な由来が不明であることから、ヒッタイトへのフルリ経由の文化的な伝播を根拠に、ヒッタイト語の同要素がフルリ語からの借入と結論づけるのは危険である。同語形に関連する要素として、アッカド語の前接的等位接続詞 -ma との相互影響も考慮しなければならない。古代オリエントに於けるシュメール語から多大な影響を受けたアッカド語の普及という通時的な言語的様相を勘案するならば、元来アッカド語において保持されていた -ma 接続詞要素の用法がアッカド語とヒッタイト語、フルリ語との接触によって、これらの言語間に連繋的な接続表現形式 (Copulative Conjunction) として確立した蓋然性も否定できないが、その成立過程に関しての詳細な考察は今後に俟たなければならない^{1 4)}。

注

1) 本稿は、科学研究費補助金(基盤研究 B:16320056)「古代オリエントの楔形文字言語間の言語接触の研究」(研究代表者:大城光正)の研究成果の一部である。

2) ヒッタイト楔形文字表記の厳密な再建によるヒッタイト語の歴史言語学的研究の成果

は吉田(2004)参照のこと。

- 3) ヒッタイト語とフルリ語の周辺言語には、パラ語-ma、リュキア語 me、リュディア語 -m(-)、アッカド語-ma の諸形が確認される。特にアッカド語-ma については自立形 u(<*wa) との共存がある。自立形接続詞 u が文、節、語を“単に”結びつける機能であるのに対して、前接形-ma は前件文の動詞に付加して、後件文との間の時間的、論理的な継続性を示唆する機能を有し、且つ、両文は同一の法(ムード)という制約が存在する。それ故、同語形の訳出は「and、and then、~so that、but、if」等のように文脈依存といえる：大城(2004:72-90)参照のこと。
- 4) 小文字ローマン体はヒッタイト表記、大文字ローマン体はシュメール表記、大文字イタリック体はアッカド表記。
- 5) 大城(2004)の同類例も参照のこと。
- 6) 同文例の「その地に雑草を生やした」ということは、ハットゥサの都市の攻略に成功してその都市を統治したのではなく、廃墟として放置したという対照的な行為を表出している。
- 7) 引用頁は Neu(*StBoT*)による。(フ)はフルリ語用例、(ヒ)はヒッタイト語用例を示す。
- 8) ten Cate(1973)参照。引用例は Cate(1973:pp. 124-126)。
- 9) Neu(1979)参照。
- 10) 同様例として、KBo V 3+II 26-27(tu-ga<*tug-a)と KBo IV 7+ III 31(tu-ug-ma<*tug-ma)も挙げられる。
- 11) 文書の成立年代は、接続詞-a を有する文書(KBo V 4)がムルシリ 2 世の時期の文書、接続詞-ma を有する文書(KUB XIX 6)がムルシリ 2 世の次王ムワタリ 2 世の文書であるので、後期作成文書といえる。
- 12) さらに後期文書における接続詞-a から接続詞-ma への交替傾向についての Luraghi (pp. 46-49)の指摘も参照のこと。
- 13) 後期ヒッタイト王国におけるフルリの影響の増大傾向等については、大城(2002)を参照のこと。
- 14) ヒッタイトのアナトリア地方への進出以前には、ハッティ族(Hattian)が先住民族として当地を占めていた。同民族の言語であるハッティ語は独特の言語特徴を有する孤立言語であり、同言語にも前接的接続詞要素-ma が認められる。同要素と他の古代アナトリア諸言語の-ma 要素との関係も今後の考察を俟たねばならない：Girbal(1886), Soysal(2004)も参照。

参考文献

- Friedrich, J. 1939, *Kleine Beiträge zur Churritischen Grammatik*, Leipzig.
-----, 1960, *Hethitisches Elementarbuch I*, Heidelberg: Carl Winter.
- Girbal, Ch. 1986, *Beiträge zur Grammatik des Hattischen*, Frankfurt.
- Güterbock, H.G. & Hoffner, H.A. 1980-1983, *Chicago Hittite Dictionary*, Vol. 3/2-3. Chicago.
- Houwink ten Cate, Ph. H.J. 1973, “The Particle -a and its Usage with Respect to the Personal Pronoun”, *Festschrift Heinrich Otten*, Wiesbaden, 119-139.
- Huehnergard, J 1997, *A Grammar of Akkadian*, Atlanta.
- Laroche, E. 1980, *Glossaire de la Langue Hourrite*, Paris.
- Luraghi, S. 1997, *Hittite* (Lincom Europa), München-Newcastle.
- Neu, E. 1979, “Zum sprachlichen Alter des Hukkana-Vertrages”, *KZ* 93, 64-84.
-----, 1996, *Das hurritische Epos der Freilassung I (StBot 32)*, Wiesbaden.
- 大城 光正 2002, 「後期ヒッタイト語の法律文書(KBo VI 4)の編纂について」『古浦敏生先生御退官記念論文集』広島, 溪水社, 137-148 頁.
-----, 2004, 「古代オリエントの楔形文字言語間の言語接触の研究」(平成 13~15 年度科研費研究成果報告書).
- Soysal, O. 2004, *Hattischer Wortschatz in hethitischer Textüberlieferung*, Leiden.
- Speiser, E.A. 1941, *Introduction to Hurrian*, New Haven.
- Yoshida, K. 2004, *Studies in Anatolian and Indo-European Historical Linguistics*, Kyoto University.
- 吉川 守 1973, 「シュメール語及びアッカド語に於ける Ventive について」『広大言語』第 13 号, 4-6 頁.
- Wegner, I. 2000, *Einführung in die hurritische Sprache*, Wiesbaden.